

越智一男氏（1909-1979）—日本の蘚苔類学 発展の一礎石としての生涯

関 太 郎*

SEKI, T. 1984. Mr. Kazuo Oti (1909-1979), a memorial tribute. Hikobia 9: 165-172.

Mr. Kazuo Oti, who studied the bryoflora of the eastern part of Ehime Pref., Shikoku, died May 11, 1979. Born in Saijo, Ehime Pref., Mr. Oti was graduated at the Ehime Normal School in 1929, and engaged in a teacher of biology of the Saijo High School until 1968. In 1942 he started to study bryophytes under the guidance of Drs. M. Kamimura, Y. Horikawa, K. Sakurai, S. Hattori, A. Noguchi and others. Based on his collection, 26 new species and 4 new varieties of Musci, and 3 new species, 2 new varieties and one new form of Hepaticae were described by Drs. Sakurai, Hattori, Noguchi and Takaki. At present, most of these new taxa have been revised, but the followings seem to be remarkable discoveries by him: *Brotherella herbacea* Sak., *Rhynchostegium shikokuense* Takaki, *Plagiochila firma* Mitt. ssp. *rhizophora* (Hatt.) Inoue and *Lejeunea otiana* Hatt. Since early time of his studies, Mr. Oti continued an investigation of the ecology of copper mosses taking a convenient opportunity of dwelling near the Besshi Copper Mine. Over the years Mr. Oti accumulated in his private herbarium about 7000 specimens of bryophytes including many isotypes mostly from the eastern part of Ehime Pref. These have been donated to the Miyajima Natural Botanical Garden of Hiroshima University (HIRO-MY). Mr. Oti would seem to be a foundation stone for the progress of Japanese bryology.

Tarow Seki, The Miyajima Natural Botanical Garden, Faculty of Science, Hiroshima University, Murohama, Miyajima-cho, Saiki-gun, Hiroshima, 739-05 Japan.

はじめに

1983年5月、東京で第1回国際蘚苔類学会議 (The First World Conference in Bryology) が開催され、23か国から140余名の参加者があった。この世界で初めての蘚苔類に関する国際学会が日本で開かれたということは、日本の蘚苔類学のレベルが、今や、世界第一級に達したことを示しているといえよう。

長い伝統のあるヨーロッパに比べて、たしかに明治の中期以降、100年に満たない蘚苔類学の歴史しか日本はない。他の植物学の分野に比べて、数の多くの研究者が、しかも経済的価値の少ないコケを地道に研究を続けて、今日の発展をもたらしたのである。その研究を支えて来た陰の力として、日本の各地で、地方のコケを熱心に採集し、その生態を観察し、多くの貴重な標

本を専門家に提供した人々があったことを忘れてはならない。越智一男氏** はまさに典型的なその一人であった。

生い立ち

四国を東西に貫く中央構造線は、愛媛県東部で著るしい断層崖を形成し、各所に清冽な湧水が流れ出している。西条もその断層崖の麓の町の一つであり、湧水で知られると共に、石鎚山から流れ下る加茂川の清流による扇状地に位置している。越智一男氏は1909年(明治42年)5月30日に、加茂川畔の神戸に生を享けた。神戸は西条祭で有名な伊曾乃神社のある地で、越智家は伊予水軍の流れを汲む名家であった。父は代助、母はえん、この二人の長男として、姉一人、妹二人の中で慈しみを一身に受けて成人された。

* 739-05 広島県佐伯郡宮島町室浜、広島大学理学部附属宮島自然植物実験所。

** 氏は筆者にとって恩師の一人にあたる方であるが、公式の追悼文として先生という敬称を使わぬことをお許し頂きたい。



Fig. 1. 越智一男氏 (1971年撮影, 越智春子夫人提供). Mr. Kazuo Oti (taken in 1971, offered by Mrs. Haruko Oti).

1929年（昭和4年）愛媛師範学校を卒業、直ちに母校の神戸小学校に訓導として勤務された。1935年（昭和10年）住友私立惣開尋常高等小学校に移られた。当時、住友の經營する別子銅山は日本最大、世界でも有数の産銅量を誇り多数の社員が山奥に生活していた。住友ではその社員の子弟の教育のために、愛媛県下の優秀な教員を抜擢し、氏もそれに応じられたものと思われる。同年、春子夫人と結婚された。春子夫人の筆者あての書簡を紹介させて頂くと「話に聞いていた通り真面目一方の教師でございました。生来の照れ屋で、あまり二人きりで語るということもなく、現代の若者には理解の出来ないことでしょうが、両親への心づかいもあったことでございましょう」とある。

1942年（昭和17年）9月、中等学校教員免許植物科の文部省検定試験に合格された。これは通称「文検」とよばれ、なかなか難しいものであった。氏と師範学校の同級生で、下宿も一緒であった三好保徳博士（日本産多足類の分類学者として著名）の追悼文（三好、1980）によれば、氏は当初、国漢の文検を目指していた由で、三好博士も氏が植物の文検に合格したことを知って驚いたとある。しかし、山本四郎教授の追悼文（山本、1980）によると、1932年（昭和7年）頃に山本教授の岳父、山本一氏（ヤッコソウの発見者、愛媛県植物研究の先達）の許へすでに出入され、植物分類の研究を志していられたようである。

蘚苔類への志向

氏が蘚苔類の研究に着手されたのは1942年頃と思われ、そのいきさつは氏自身の言葉でここに紹介したい。これは越智（1942b）の緒言の一部である。「私は蘚苔類につ

いて前々より少からぬ興味を持って居た。それがいよいよ本格的に採集に手を染めるに至ったのは、昭和17年であった。思ふに隣縣高知に於ては、高等植物と並んで蘚苔の研究も諸先輩によって早くよりなされ、其結果夫等の方々によって斯学の上に偉大なる足跡を残され、しかも尚後輩によって孜々として、努力が續けられている現状である。吾が伊豫を見るに嘗ては南郡に調査を進められた先輩あり、現在も松山に在って研究を續けられる方もあるらるかに承るが、全般的に見て殆んどが處女地に等しく、高等植物の活潑なる研究に比して甚だ寂寥を禁じ得ない次第である。（中略）由來、私の勤務地が別子鉱山の事業現場である東平（800m）の地にあり、資料に恵まれているところより、この資料を専門家に提供する事により、一は日本フローラの究明に資し、一は自らの研究にとの考へより敢えてこの調査研究に乗出したのである」と述べていられる。氏の標本を見ると、No. 1 は昭和12年12月12日に神戸村射場ヶ谷（現、西条市）で採集されたもので、「*Polygonatum inflexum* Jaeg. カギバニハスギゴケ、堀川同定、コスギゴケ（桜井）」と記されている。当時、広島文理科大学で東アジアの蘚苔類を精力的に研究していた堀川芳雄博士からの氏への第一信は14年11月30日付であり、また桜井久一博士（医学者であるがベルリン留学中に、ベルリンダーレム博物館の H. Reimers 博士から蘚苔類研究の指導を受けた）からの第一信は17年11月12日付であり、いずれも後年の同定であろう。氏の初期の標本には高知県で蘚苔類の研究を進めておられた上村登博士の同定したものが多い。筆者が上村博士からうかがったところでは、氏は最初に上村博士に指導を請われたようである。さらに、当時、新進気鋭の蘚苔類学者として活躍中の野口彰博士、服部新佐博士へも標本を多数提供された。服部博士から氏への第一信は19年6月29日付である。これらの方々からの同定書簡は、氏によってていねいに保管されており、日本の蘚苔類学の勃興期の歴史を知る貴重な資料である。

戦争が終って、1947年（昭和22年）東平中学校教頭に任せられた。この年、氏のこれまでの蘚苔類の研究成果が相ついで発表された。そのひとつは、植物学雑誌に「伊豫國新居郡産蘚苔類（其一）」と題して発表されたもので、新種の記載は桜井博士によってなされている。この研究は文部省科学研究費助成金を受けてなされたもので、植物学雑誌への掲載にあたっては、桜井博士がいろいろと尽力されたことが、博士の書簡からうかがえる。この表題で、第2報（1949）、第3報（1950）と植物雑誌へ報告され、蘚類の16新種、2新変種が発表された。

1947年には、もうひとつ苔類の報告もなされている。これは、服部新佐博士の同定を受けた苔類フロラで「東豫苔類の研究」と題され、25ページの謄写版印刷で、愛媛県新居郡角野町で発行されている。東予とは東部伊予の意味で、高縄山地より東を指す。氏がおもに調査されたのは、新居郡の東部、角野町、中萩町（いずれも現在は新居浜市に含まれる）、宇摩郡の西部、新居浜市と西条市の大部分が含まれ、石鎚山と周桑郡は含まれていない。後年、氏は石鎚山系を精力的に調査されたが、その他では弓削島、四阪島、生名島、松山、出石寺山などに足をのばされたくらいで、生涯を上記の東予の蘚苔類の調査に捧げられた。

さて、「東豫苔類の研究」には、24科52属125種、2亜種、19変種、7品種が報告され、裸名ではあるが服部博士による2新種、2新変種、3新品種が挙げられ、日本新産2種も含まれている。1942年に氏が本格的に蘚苔類の研究を始められて、わずか5年間、しかもそれは戦争中という困難な時期に、よくもこれだけの苔類フロラを調べられたものと敬服せざるを得ない。このフロラには、東予において出現の予想される種はほとんど網羅されている。標本点数は1700余点で、すべて服部博士の同定になるもので、これまた感服に値するものである。博士の激励とこれに応えた氏の深い友情の絆が感ぜられる。

1947年の暮には西条市立青年学校に帰任され、1948年（昭和23年）9月から西条第一高等学校教諭、1955年（昭和30年）4月から1966年（昭和41年）の定年まで愛媛県立西条高等学校教諭、つづいて同校講師を1968年（昭和43年）まで務められた。1968年から1978年（昭和53年）まで西条市立郷土博物館に勤務され、教育に、東予の植物研究に、自然保護に大きな功績を残された。1978年頃より体調をくずされ、1979年（昭和54年）5月11日、肺炎のため逝去された。満70歳まであと20日余りという日であった。

植物学上の業績

氏の植物学上の業績を振り返ると、まず蘚苔類の分野で氏の採集品が専門家の論文に引用された件数は（種、変種、品種などを1件として）211件に及んでいる。標本点数で見るならば、その数倍に当るであろう。これは筆者の載録したカードに基づくので、まだ漏れがあることと思われる。氏の蘚苔類の採集品は、すでに述べた専門家の他に、高木典雄（ヒツジゴケ科、シッポゴケ科）、鈴木兵二（ミズゴケ属）、新敏夫（ホウオウゴケ属）、尼川大録（ヤバネゴケ科、ヒシャクゴケ科、ツボミゴケ科）、

越智春美（カサゴケ科、ヒヨウタンゴケ科）、安藤久次（ハイゴケ科）、桑原幸信（フタマタゴケ科）、岩月善之助（ナダゴケ科）、水谷正美（クサリゴケ科）、渡辺良象（シノブゴケ科）、井上浩（ハネゴケ科）、北川尚史（イチヨウウロコゴケ科）、関太郎（ハシボソゴケ科）などのモノグラフ研究のために提供された。また、直接に氏から標本の提供を受けなかったものの、後年、氏の採集品を研究した専門家に T. Koponen（チョウチンゴケ科）、斎藤亀三（センボンゴケ科）、神田啓史（ヤナギゴケ科）、出口博則（ギボウシゴケ科）の諸博士がいる。

これらの専門家が氏の採集品に基いて発表した新種、新変種、新品種と、その後の研究による所属の変更を次に示す。

越智一男氏の標本に基いて発表された新種、新変種、新品種

List of the new taxa described based on the collection by K. Oti

蘚類 Musci

Brotherella aurea Sak. in Oti, Bot. Mag. Tokyo 60: 85.

1947 = *Brotherella fauriei* (Card.) Broth., fid. Seki 1968.

Brotherella barbelloides Sak. var. *viridis* Sak. ex Oti, Bot.

Mag. Tokyo 60: 85. 1947 = *Brotherella complanata* Reim. et Sak., fid. Horikawa & Seki 1960.

Brotherella henonii (Duby) Fleisch. var. *breviseta* Sak., Journ. Jap. Bot. 24: 137. 1949 = *Brotherella henonii* (Duby) Fleisch., fid. Seki 1968.

Brotherella herbacea Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 63: 79. 1950.

Brotherella hypnoides Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 63: 80. 1950 = *Brotherella fauriei* (Card.) Broth. fid. Seki 1968.

Brotherella otii Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 63: 79. 1950 = *Hypnum yokohamae* (Broth.) Paris var. *kusatsuense* (Besch.) Seki, fid. Seki 1968.

Brotherella paraphyllosa Sak., Journ. Jap. Bot. 24: 135. 1949 = *Brotherella fauriei* (Card.) Broth., fid. Seki 1968.

Bryum epiphytioides Ochi, Journ. Jap. Bot. 29: 213. 1954 = *Bryum cellulare* Hook. var. *epiphytioides* (Ochi) Ochi, fid. Ochi 1959.

Bryum pseudotriquetrum (Hedw.) Schwaegr. var. *elatum* Nog., Journ. Jap. Bot. 28: 80. 1953 = *Bryum pseudotriquetrum* (Hedw.) Schwaegr., fid. Ochi 1959.

Dicranoloma otii Sak., Journ. Jap. Bot. 27: 254. 1952 =

- Dicranum scoparium* Hedw., fid. Takaki 1966.
Dicranum otii Sak., Journ. Jap. Bot. 27: 158. 1952=
Dicranum nipponense Besch., fid. Takaki 1964.
Dicranum pogonatoides Sak., Journ. Jap. Bot. 27: 157.
1952=*Dicranum nipponense* Besch., fid. Takaki 1964.
Grimmia otii Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 62: 142.
1949=*Schistidium liliputanum* (C. Muell.) Deguchi,
fid. Deguchi 1978.
Heterophyllum sikokianum Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo
63: 77. 1950=*Hypnum haldanianum* Grev., fid. Seki
1968.
Hyophila subspathulata Sak., Bot. Mag. Tokyo 67: 41.
1954=*Trichostomum platyphyllum* (Broth. ex Ihs.)
Chen, fid. Saito 1975.
Isopterygium capitulatum Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo
63: 77. 1950=*Isopterygium fauriei* Card., fid. Iwatsuki
& Noguchi 1973.
Leptodontium japonicum Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo
60: 85. 1947=*Didymodon rigidicaulis* (C. Muell.)
Saito, fid. Saito 1975.
Leptodontium sikokianum Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo
62: 142. 1949=*Dichodontium pellucidum* (Hedw.)
Schimp., fid. Saito
Merceya mollissima Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 62:
141. 1949=*Scopelophila ligulata* (Spruce) Spruce, fid.
Zander 1967.
Merceyopsis excavata Sak., Journ. Jap. Bot. 27: 281. 1952
=Gymnostomum aeruginosum Sm., fid. Saito 1975.
Merceyopsis sikokiana Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 60:
84. 1947=*Scopelophila ligulata* (Spruce) Spruce, fid.
Zander 1967.
Mnium giganteum Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 63: 79.
1950=*Plagiommium japonicum* (Lindb.) Kop., fid.
Koponen 1974.
Mnium maximowiczii Lindb. var. *sikokianum* Sak. ex Oti,
Bot. Mag. Tokyo 62: 142. 1949.=*Plagiommium maximowiczii* (Lindb.) Kop., fid. Koponen 1974.
Plagiothecium otii Sak., Bot. Mag. Tokyo 62: 114. 1949
= *Plagiothecium cavifolium* (Brid.) Iwatsuki f. *otii*
(Sak.) Iwatsuki, fid. Iwatsuki 1970.
Rhynchosstegium shikokuense Takaki, Journ. Hattori Bot.
Lab. No. 16: 43. 1956.
Schwetschkeopsis binervula Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo
62: 142. 1949=*Schwetschkeopsis robustula* (Broth.)
Ando, fid. Ando 1961.
Taxiphyllum nitidulum Sak., Bot. Mag. Tokyo 63: 199.
1950.
Thuidium iyoense Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 63: 79.
1950=*Thuidium recognitum* (Hedw.) Lindb. var. *delicatulum* (Hedw.) Warnst., fid. Watanabe 1972.
Thuidium subviride Sak. ex Oti, Bot. Mag. Tokyo 62:
141. 1949=*Thuidium kanedae* Sak., fid. Watanabe
1972.
Warburgiella sikokiana Sak., Journ. Jap. Bot. 28: 58.
1953=*Brotherella henonii* (Duby) Fleisch., fid. Seki
1968.
- 苔類 Hepaticae
- Anastrophyllum japonicum* Steph. var. *otianum* Hatt.,
Journ. Hattori Bot. Lab. No. 9: 16. 1953=*Anastrophyllum assimile* (Mitt.) Steph., fid. Kitagawa 1966.
Cephalozia otaruensis Steph. var. *acrogyna* Amakawa,
Journ. Hattori Bot. Lab. No. 7: 73. 1952.
Lejeunea otiana Hatt., Bot. Mag. Tokyo 65: 16. 1952.
Plagiochila japonica S. Lac. f. *stipulata* Hatt., Journ. Jap.
Bot. 25: 47. 1950=*Plagiochila acanthophylla* Gott. ssp.
japonica (Sande-Lac.) Inoue, fid. Inoue 1958 & 1962.
Plagiochila rhizophora Hatt., Journ. Jap. Bot. 25: 141.
1950≡*Plagiochila firma* Mitt. ssp. *rhizophora* (Hatt.)
Inoue, fid. Inoue 1960.
Plectocolea otiana Hatt., Journ. Jap. Bot. 28: 185.
1953≡*Jungermannia otiana* (Hatt.) Amakawa, fid.
Amakawa 1960.

上記には蘚類で26新種、4新変種、苔類で3新種、2新変種、1新品種があるが、現在、この中で残っているものは蘚類で3種、1品種、苔類で3種である。蘚類の新種の大部分は桜井博士の発表したものであるが、これらが後年の研究によって、新種と認められなくなったとしても、決して越智氏の採集品の価値が下がったわけではない。新種が発表され、それが再検討されるという過程を経て日本の蘚苔類学が大きく発展したのである。その原動力となったものが氏の採集品に他ならなかったのである。

消えない足跡

氏の発見された蘚苔類の中で特記すべきものを紹介すれば、蘚類ではナヨナヨカガミゴケ (*Brotherella herbacea* Sak.) がまず挙げられる。これは1949年8月8日に石鎧

^{オトウゲニ}山の御塔谷で採集された。この時、氏は石鎚山の土小屋に長期滞在して調査された。現在の土小屋は、スカイラインが通じ、ホテルも建っているが、当時は、土小屋と称する山小屋が一軒あるのみで、下界へは何の通信手段もなかった。氏は熱心のあまり長期滞在し、家には何の連絡もされなかった。春子夫人の筆者あて書簡の一節はその時のことではないかと思われる：「夏休みに、一寸採集に行くから、と家を出ましたが、西之川あたりで二三泊の予定が一週間も帰らず、老父母は心痛の余り山狩の段取りを親類へ頼んで居りましたら、ひょっこり帰宅しました。盆の十六日と云う日でございました」。御塔谷は西之川から土小屋へ至る谷である。ナヨナヨカガミゴケは、石鎚山では海拔1500m前後のブナ林の林床でササの枯葉上や稈上に生育する特異な生態をもち、天城山、紀伊半島、四国、九州、屋久島の1000m以上に分布し、第三紀の遺存植物に富むソハヤキ地帯に分布が限られている。ヨーロッパで第三紀遺存種といわれる*Brotherella lorentziana* (Mol.) Loeskeに形態的にもよく似ているし、ブナ林の林床で他植物の枝を被うという生態までそっくりである（関、1960）。1972年に筆者はドイツ南部のSchwarzwaldで、*Brotherella lorentziana*の生態を観察し、ますますその確信を深めた。

シコクカヤゴケ (*Rhynchostegium shikokuense* Takaki) は1950年1月10日に西条市で発見された。その後、関(1965)により屋久島と愛媛県伊予郡広田村からの報告があるが、きわめてまれな種である。本属としては葉細胞が幅広く、特徴のはっきりした種である。

苔類ではヒゲハネゴケ (*Plagiochila rhizophora* Hatt.) がある。本種は越智(1947b)には *Plagiochila otiana* Hatt. という裸名で記されている。タイプ標本は新居郡角野町角石原(現在は新居浜市)で1944年に採集された。井上浩博士は日本及び台湾産のハネゴケ科の研究(Inoue, 1958)において、ハネゴケ属 (*Plagiochila*) のコハネゴケ節 (Sect. *Acanthophyliae*) にヒゲハネゴケ亜節 (Subsect. *Rhizophorae*) を新設した。その後、Inoue(1960)は本種をヒマラヤ産の *Plagiochila firma* Mitt. の亜種に組みかえたので、Sect. *Firmae* Carl に属することになった。近縁種は北米西部にも知られており、ヒゲハネゴケの仲間はヒマラヤ-日本-北米西部と興味ある分布を示している。

オチクサリゴケ (*Lejeunea otiana* Hatt.) は1944年8月10日に西条市中西で採集された。筆者が氏に直接うかがったところでは、自宅の近くの何でもない小さな溝のふちの岩上で採集されたとのことである。その後、西南

日本の各地から知られたが、下片の形態や油体にもはっきりした特徴のある種である。

越智氏の蘚苔類の研究で注目すべきものに銅ごけ (copper moss) の生態と分布の調査がある。銅イオンを含む水がしたたる岩上に特異的に生育する蘚苔類は、ヨーロッパ、北アメリカ、南米などに知られていたが、Persson (1956) が基物の化学分析を行って、全世界の分布と生態をまとめてから、一躍、注目を集めた。また銅ごけの中のある種は火山地帯の硫黄泉にも生育し、その生理学的な特異性からも関心が高まった。越智氏は別子銅山という地の利を得て、すでに1942年に *Merceyopsis sikokiana* Sak. を、1947年に *Merceya mollissima* Sak. を発見していたが、その分類学的研究は難しく、Noguchi (1956) まで待たねばならなかった。氏は野口博士に協力して、多数の標本を東予各地から送付され、その生態については1956年に野口博士と共に、服部植物研究所報告に発表された。

1963年にスウェーデンの H. Persson 博士夫妻が来日され、堀川教授と共に筆者は、10月4日、夫婦を愛媛県周桑郡千原銅山に案内し、そこで越智氏を夫妻に紹介した。世界の銅ごけの生態と分布をまとめられた Persson 博士も *Merceya ligulata* (現在は *Scopelophila ligulata*) と *Jungermannia pallida* (現在は *J. vulcanicola*) が銅山に生育しているのを見たのは初めての由で、大喜びであった。越智氏も博士夫妻に直接に説明する機会を得て、その喜びはひとしおの感であった。今は、Persson 夫妻、堀川教授、越智氏とすべて他界され、筆者にとっては感慨深い思い出となっている。

1956年に「陸産蘚類の沈水培養について. I. 葉形の変化」を日本生態学会誌に発表された。これは陸上生の蘚類を強制的に水中に沈めて培養し、その変化を見ようとしたもので、いわゆる実験分類学 (experimental taxonomy) を目指したものであった。氏はこの手法によって日本産のシラガゴケ属 (*Leucobryum*) の分類を志さされたようで、その計画を筆者に熱っぽく語られたのが印象に残っている。

氏は晩年、白内障のために顕微鏡を見るのが困難となり、高等植物の研究、とくにシダ類に興味をもたれた。その成果として、1964年に宮内俊美・三好保徳・山本四郎の諸氏との共著「愛媛県羊齒植物誌」が刊行された。1958年(昭和33年)7月20~27日に愛媛県・愛媛新聞社の主催で行われた石鎚山系総合学術調査には、お元気で参加されたが、この時もシダ類の調査を担当された。

1951~1971年にかけて、氏は植物についての小観察、



Fig. 2. 越智一男氏(左), 堀川芳雄教授, Herman Persson 博士. 愛媛県周桑郡千原銅山にて (1963年10月4日, 関太郎撮影). Mr. Kazuo Oti (left), Prof. Yoshiwo Horikawa and Dr. Herman Persson at the Chiwara Copper Mine, Ehime Pref., Shikoku (Oct. 4, 1963, photo by T. Seki).

分布報告などを、「採集と飼育」、「植物趣味」、「愛媛生物」、「愛媛の自然」、「エヒメアヤメ」などに多数発表された。発芽後のイチョウの葉の変化など注目すべき観察が多く含まれている。

人となり

氏の横顔について、春子夫人の筆者あて書簡の一部を紹介すれば、「(結婚して)四十四年間の暮しの間、開墾畑へ一度、新開地へ一度だけ子供連れて参りました。道中、道が涉りません。“アッ一寸待て”と云っては土手をかけ降り，“珍しい”とか“新種かな”とか云って拡大鏡で調べたり、坂をよじ登り、歎声を上げたり、おつき合いにたいへんでございました。一時間余あれば行ける畑へ三時間余もかかる始末で、行きつくと直ぐに昼食にからねばなりません。手伝って貰う心算が植物採集のお供になったり、お楽しみ会になったりでございます」という有様であった。

私事にわたるが、筆者にとって最初に蘚苔類の研究の手ほどきをして下さったのは氏であった。1949年(昭和24年)に松山市で愛媛県下の教員による科学的研究の発表会があり、前々からコケに興味を感じていた筆者は、氏の「石鎚連峰蘚類の生態地理分布上の二三の問題」というテーマを新聞紙上で見て発表を聴きに行ったのである。そこで、氏に会って、これから標本の同定をお願いしたい旨申し出たところ、快く引き受け下さった。氏は当時の筆者のハガキを保存しておられ、24年12月7日付には「御ていねいに御葉書ありがとうございました。先生の発表はとてもよくわかりました。論文の方も帰ってか

ら何べんも読んでみました。道後には、夜明峠(註、石鎚山の峠)のブナのように蘚のついているものはありませんが、湯神社、伊佐爾波神社などの古いアラカシ、クス、アベマキ、クヌギなどには相当たくさん蘚が着生しています。お頼みしました標本は少しも急ぎませんからどうぞおひまな時に少しづつ見ていただいたので結構です」とある。しかし、氏は実に早く同定して下さった。次々と、一中学生が送る標本に対し、あたかも一人前の研究者に対するような真摯な同定を寄こされた。氏にとって不明の種があった時は、桜井博士や野口博士にその標本を送られた。1950年に筆者の自宅近くの池の底に一面に茂っていた蘚類は、氏を通じて野口博士に送られ、*Bryum pseudotriquetrum* (Hedw.) Schwaegr. var. *elatum* Nog. という新変種として植物研究雑誌に発表された。氏はこれをとても喜んで下さった。

ひんぱんに文通はしたが、西条と松山に離れていたので、筆者が氏に二度目にお会いしたのは、初対面から三年たった1952年(昭27年)4月であった。この時は、松山市湯山の音田谷へ氏と共に採集を行った。この時たいへん面白いことがあった。湯山の河中でバスを降りて音田谷へ小さな峠を登っていた時のことである。話がまたまキセルゴケのことになり、筆者がまだ見たことがないというと、氏は一度だけ採集した経験があると語られた。その時、峠道は乾燥した花崗岩のスギ林に差しかかっていた。氏は「キセルゴケがあったのはちょうどこんな所ですよ」といわれた。そして、5分も歩かないうちに、氏は「あっ、キセルゴケがあった」と叫ばれた。その指さされた地上には、本当にキセルゴケが2~3本生えていた。これには二人ともまったく驚いてしまった。このように氏はフィールドにおいて独特の鋭い勘を持っておられた。1958年に行われた石鎚山の総合調査の際も、イシヅチゴケについて、この鋭い勘を發揮され、筆者に教えられるところが多かった。

氏はまた非常な達筆であった。俳句、短歌にも長じておられ、晩年は歌作に傾倒されたようである。雑誌「国民文学」に投稿され、短歌の指導を受けられた由である。亡くなられた年(54年)の「国民文学」の年刊歌集に載った氏の作品を春子夫人が抜き書きして下さった中から一首をここに紹介する:

妻が持ちしヒイラギモクセイ荒刺の
青葉がくれに白金の花

おわりに

氏が生涯をかけて集められた蘚苔類の標本は、春子夫

人をはじめ御遺族の方々の御厚意により、広島大学理学部附属宮島自然植物実験所へ、1979年(昭和54年)10月に寄贈された。氏の蘚苔類標本は7150点に及び、多数の副基準標本を含む貴重なものである。前述したように、その採集の地域はおもに愛媛県東部に限られるけれども、その地域を徹底的に採集したコレクションとして価値が高い。「自然史関係大学所蔵標本総覧」(1981)の中に「特色あるコレクション」として、「越智一男コレクション」が筆者によって紹介されている。現在、標本の整理が続けられており、できるだけ早く利用可能な態勢に持っていきたい。今後、末長く「越智一男コレクション」が蘚苔類の研究・教育に活用されることを願いつつ、謹んで氏の御冥福を祈る次第である。

故越智一男氏の蘚苔類標本の広島大学への寄贈は越智春子夫人並びに御遺族の御厚情によるもので、ここに深く感謝申しあげる。また、春子夫人からは、本文を草するにあたり詳しいお便りや資料・写真の御提供を頂いた。紙面の都合でそのすべてを紹介できなかったことをお許し願いたい。

今治明徳短大の山本四郎教授、聖カタリナ短大の三好保徳教授には、故越智氏の標本の処遇について色々と御配慮を頂いた。松山東雲短大の松井宏光助手には、標本の移送、文献の探索などでお世話になった。服部植物研究所長の岩月善之助博士にも文献の借用をお願いした。これらの方々に対し、深甚の謝意を表したい。

広島大学の鈴木兵二名誉教授、安藤久次教授には、故越智氏の標本の受贈に際し御高配を頂いた。大学院生の諸君には標本の運搬と整理でお世話になった。ここにあわせてあつく御礼申しあげたい。

越智一男業績目録

- 1940. 西條市植物目録。(贋写版)
- 1947a. 伊豫國新居郡産蘚苔類(其一). 植物学雑誌 60: 83-86.
- b. 東豫苔類の研究. 25 pp. 角野. (贋写版)
- 1949a. 伊豫國新居郡産蘚苔類(其二). 植物学雑誌 62: 141-145.
- b. 石鎚連峰蘚類の生態地理分布上の二三の問題. 愛媛科学研究発表会論文集第2回. 松山. (贋写版)
- 1950. 伊豫國新居郡産蘚苔類 III. 植物学雑誌 63: 77-82.
- 1951. マゼニゴケの雄器托の精子保存法. 採集と飼育 13: 168.
- 1952. 東部伊豫におけるシラカンバの生育地. 植物趣味 14: 1.
- 1953a. 落葉樹に寄生するヒノキバヤドリギ. 採集と飼育 15: 82.
- b. 伊豫八堂山の植物. 植物趣味 15: 15-19.
- 1954. 愛媛県四阪島の植物. 植物趣味 15: 20-23.
- 1955a. 愛媛県四阪島の植物 II. 植物趣味 16: 23-34.
- b. 西條藩陣屋跡に生育する植物. 植物趣味 17: 16-24.
- c. 西条市に出現したタウコギ属の1種. 採集と飼育 17: 348-350.
- d. 別子東平の紅葉について. 愛媛生物(愛媛県高等学校生物教育会編) No. 4: 23-32.
- 1956a. 陸産蘚類の沈水培養について. I. 葉形の変化. 日本国際学会誌 5: 109-111.
- b. *Merceya ligulata* 及び *Merceyopsis sikkimensis* の生態. 服部植物研究所報告 No. 16: 122-123. (野口彰・越智一男共著)
- c. 発芽後1年間に出現したイチョウの葉について. 植物趣味 17: 12-14.
- 1957. 発芽後2年目に出現したイチョウの葉について. 植物趣味 18: 15-17.
- 1958a. 発芽後3年目に出現したイチョウの葉について. 植物趣味 18: 5-8.
- b. 伊予西条市におけるムラサキカタバミの繁殖と葉の奇形. 植物趣味 18: 4-6.
- c. ムラサキカタバミの葉の奇形. 植物趣味 19: 4-8.
- d. アツモリソウ属1種の異常花序. 採集と飼育 20: 241.
- e. 東予におけるムカシヨモギ属 *Erigeron* L. 植物について. 愛媛生物 No. 6: 1-12.
- 1959a. 発芽後4年目に出現したイチョウの葉について (1). 植物趣味 20: 7-11.
- b. クロマツの奇形葉. 採集と飼育 21: 11-12, 16.
- c. 瑞応寺の植物について. 愛媛生物 No. 7: 1-27.
- 1960a. しだ類. 石原保編. 石鎚山系の自然と人文—石鎚山系総合学術調査報告一. pp. 168-172. 愛媛新聞社, 松山.
- b. テッポウユリの異常鱗茎. 採集と飼育 22: 51, 63, 148.
- c. キンエボシの茎の屈光性. 採集と飼育 22: 148.
- d. 東予における羊齒植物の分布. 愛媛生物 No. 8: 1-4.

- e. 鈍川の植物. 愛媛の自然 (愛媛県立博物館編) 2: 2-4.
- f. 興隆寺の植物. 愛媛の自然 2: 4-5.
- 1961a. 馬島の植物. 愛媛生物 No. 9: 27-29.
- b. 西条市東宮付近の植物. 愛媛の自然 3: 4-7.
- c. 多伎之宮神社の植物. 愛媛の自然 3: 13-16.
- d. 海上・滑床の植物. 愛媛の自然 3: 16-20.
- e. トウツバキについて. エヒメアヤメ (愛媛植物同好会編) No. 11: 1-11.
- 1962a. 市の川の植物. 愛媛の自然 4: 1-3.
- b. コケの採集と標本の整理. 愛媛の自然 4: 8-11.
- 1964a. 愛媛県羊齒植物誌. 82 pp. 愛媛県高等学校生物教育会, 松山. (宮内俊美・三好保徳・越智一男・山本四郎共著)
- b. 大山祇神社の植物. 愛媛の自然 6: 8-9.
1965. 東予におけるイシミカワの分布. 採集と飼育 27: 256-259.
1968. 松村先生を偲んで. 植物趣味 27: 12.
1971. ホウロクイチゴ (*Rubus sieboldii* Bl.) の新産地. エヒメアヤメ No. 20: 9-10.

文 献

- Amakawa, T. 1960. Family Jungermanniaceae of Japan. II. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 22: 1-90.
- Ando, H. 1961. A revision of the species of *Tetracladium* described from Japan and Korea. Hikobia 2: 296-297.
- Deguchi, H. 1978. A revision of the genera *Grimmia*, *Schistidium* and *Coscinodon* (Musci) of Japan. Journ. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2 (Botany), 16: 121-256.
- Horikawa, Y. & Seki, T. 1960. Studies on the genus *Brotherella* in Japan (1). Hikobia 2: 75-98.
- Inoue, H. 1958. The family Plagiochilaceae of Japan and Formosa. II. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 20: 54-106.
- 1960. Contributions to the knowledges of the Plagiochilaceae of southeastern Asia. II. On some Himalayan species of *Plagiochila*. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 23: 29-36.
- 1962. Contributions to the knowledge of the

- Plagiochilaceae of southeastern Asia. 3. Studies in *Plagiochila sciophylla-acanthophylla* complex. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 25: 91-101.
- Iwatsuki, Z. 1970. A revision of *Plagiothecium* and its related genera from Japan and her adjacent areas. I. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 33: 331-380.
- & Noguchi, A. 1973. Index muscorum japonicorum. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 37: 299-418.
- Kitagawa, N. 1966. A revision of the family Lophoziaeae of Japan and its adjacent regions. II. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 29: 101-149.
- Koponen, T. 1974. A preliminary report on the Mniateae in Japan. II. Hikobia 7: 1-19.
- 三好保徳 1980. 越智一男さんの逝去を悼む. エヒメアヤメ No. 28: 69.
- Noguchi, A. 1956. On some mosses of *Merceya*, with special reference to the variation and ecology. Kumamoto Journ. Sci., Ser. B, Sect. 2, 2: 239-257.
- Ochi, H. 1959. A revision of the Bryaceae in Japan and the adjacent regions. 124 pp. Tottori.
- Persson, H. 1956. Studies in "copper mosses." Journ. Hattori Bot. Lab. No. 17: 1-8.
- Saito, K. 1975. A monograph of Japanese Pottiaceae (Musci). Journ. Hattori Bot. Lab. No. 39: 373-537.
- 関 太郎 1960. コケ類. 石原保編, 石鎚山系の自然と人文—石鎚山系総合学術調査報告—. pp. 154-168. 愛媛新聞社, 松山.
- 1965. 日本産コケ類ノート(7). ヒコビア 4: 330.
- Seki, T. 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. Journ. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2 (Botany), 12: 1-80.
- Takaki, N. 1964. A revision of Japanese *Dicranum*. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 27: 73-123.
- 1966. A revision of Japanese *Dicranoloma*. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 29: 214-222.
- Watanabe, R. 1972. A revision of the family Thuidiaceae in Japan and adjacent areas. Journ. Hattori Bot. Lab. No. 36: 171-320.
- 山本四郎 1980. 越智一男さんの思い出. エヒメアヤメ No. 28: 70.
- Zander, R. H. 1967. The New World distribution of *Scopelophila* (= *Merceya*). Bryologist 70: 405-413.

1983年6月30日受理